

# 解説

## 新郷 啓子



バヒーヤ・マフムード・アワーフ (Bahia Mahmud Awah) は一九六〇年、西サハラ南部チーリス地方に生まれた。現在はマドリッドに暮らし、詩人であり、マドリッド自治大学・社会人類学科の名誉教授である。

この『木の板で読み書きを教えてください先生』(La maestra que me enseñó en una tabla de madera 二〇一一年刊) は亡くなった母親を回想したエッセー集であるが、先祖代々遊牧社会を営んできた西サハラ住民特有の暮らしの風景が随所に浮き彫りにされている一方、それを中断あるいは放棄せざるを得ない現在の状況の描写も点在し、文化人類学者の著した匂いのする本だ。

著者がスペイン語で表現活動を続けているのは、西サハラがスペインの植民地だったことに依る。アワーフが十五歳だった一九七五年、宗主国スペインが撤退を開始したと同時に隣国モロッコ軍とモーリタニア軍の侵攻が始まったた

め、彼は生まれ故郷、家族と離別してアルジェリア領土内に設けられた難民キャンプへ逃げ、その後キューバとマドリッドで学業を修めた。二〇〇五年、西サハラの同世代詩人たちとグループ「友情の世代 Generation de la Amistad」を

結成。そのメンバーと共にヨーロッパや合衆国、南米で文化行事、講演会に参加、活躍している。アフリカ伝統社会のほとんどの文芸が口承で維持されてきたように、西サハラもその例にもれず口承文学の文化地域である。

ここに訳出したのは『木の板で読み書きを教えてください先生』の抄訳で、原著の中からハサニーヤの固有名詞や人名の比較的少ない節を選び、筋道がつく方向に収めてみた。エッセーの背景には一貫して故郷への想いがあるが、これは西サハラの人々の歴史的境遇から来ている。

スペインの植民地だった西サハラは、一九七五年十一月、モロッコとモーリタニアそしてスペインの三国間秘密協定により隣接する二国に譲渡され、両国の軍事侵攻に対しポリサリオ解放戦線が解放戦争を始める。

一九七九年、モーリタニアはポリサリオ戦線と和平協定を結び、占領していた南部から撤退するが、モロッコがやがてこも占領。そして南北二七〇〇キロメートルに及ぶ防壁を建設して西サハラ領土の殆どを囲い込み、軍事支配している。住民の一部はアルジェリア領土内に建

設された難民キャンプに亡命したため、西サハラ人民は壁の内側の占領地と難民キャンプに二分されたまま、既に四十年の歳月が流れている。

難民キャンプのある一帯は、ハマードと呼ばれる岩石沙漠で、荒寥とした土地だ。一九七五年末、ここにテント柱を打ち込んだ人々は、自分の生涯の大半をここで過ごすことになるうとは誰も予期していなかった。

当時ポリサリオ解放戦線は軍事と外交の両面で解放闘争を担いつつ、もう一方で難民キャンプの組織化に尽力する。それは海外からの物的支援に支えられながら、住民生活を保障し、解放独立後の西サハラ国家社会のひな型をここに建設する試みだった。一九七六年二月二十七日にはサハラ・アラブ民主共和国が建国された。

亡命政府による外交活動の下に、サハラ・アラブ民主共和国は国際的承認を獲得してゆき、アフリカ連合のメンバー国ともなった。

現在、人口およそ十五万人の難民キャンプは、六つのウィラヤー(県)とその下に五六のダーク(市)という行政区分で構成され、行政区はそれぞれ、西サハラの地名を戴く。難民キャンプ建設の当初からポリサリオ戦線が重要視したのは教育と保健部門で、外国からの援助物資に依存して最低限の保障が維持される。

沙漠の真ただ中に浮かぶ孤島のようなこの難民キャンプでも、諸外国NGOの現地活動が

毎年定期的に実施され続けている。援助物資コンテナを積む大型トラックの群れが海を渡る「平和のためのキャラバン隊」、医薬物資を携えてやってくる医療団、そして映画関係者たちが開催する「サハラ国際映画祭」だ。

この映画祭は外国の俳優、映画作家たちも参加して、ダフラ・ウィラーヤのキャンプに会場を設けおおよそ一週間、満天の星の夜空に張られた銀幕に数十本の作品が上映される。これと並行して昼の部では映像制作の教室が開かれ、映像の世界で表現に挑もうとする難民キャンプの若い男女が研修生として集まっている。

バヒヤ・マフムド・アワーフは、スペイン人映画作家と五年の年月をかけてドキュメンタリー映画『レグナー・サハラウィー』詩句で語つて』(Ugna: habla al verso saharai「レグナ」とはハサニヤで「文学」の意)を共同制作し、二〇一四年度のサハラ国際映画祭に出品した。そして見事に最優秀賞を受賞し、トロフィーとなつている一頭の白ラクダを獲得している。このドキュメンタリー映画は、十数名のハサニヤ詩人男女が詩句で自分たちの歴史や、文化、自然を謳い綴る構成になつている。先述したように西サハラは口承文芸の文化圏にあり、人々は詩を非常に身近に感じて暮らしてきたので、西サハラ国民、サハラウィーは「詩の民」と呼べるだろう。それを垣間見るような場面に筆

者は出会つたことがある。

難民キャンプで、ある中年女性のハイマ(天幕)に寝泊まりしていた時のことだ。ガスボンベに火を点けるライターが切れて、これを借りて彼女がちよつと外へ出た。そして戻つて来た時には老齢の男性を連れていた。彼女はその男性をハイマに招き入れ、丁寧に茶を淹れ始めた。最初は四方山話をしている様子だったが、そのうち彼女は頼みごとをしたらしく、相手が快諾すると少女のように目を輝かせて腰を上げ、ハイマの隅にある行李を開けて紙切れを取り出し戻ってきた。再び老人の前に座つてそれを読む口調から、私にも詩であることがわかつた。老人はじつと耳を傾け、二度これを聞き、嬉々とした顔つきの彼女にコメントをした。三杯目の茶をいただいた後、老人が立ち去つた後、彼女が私に説明してくれた。道端で偶然、詩人であるこの老人を見かけた彼女は、自分の書いた詩を聞いてもらいたくしてお茶を招いたので。詩が好きなのだと彼女は言っていたが、アワーフのデトウのように、辛苦をなめる難民生活の中で、詩が心の支えになつていたのではないだろうか。このように祖国を奪われ、亡命の地あるいは占領国の支配下で生きる西サハラの人々に、国際社会は四十年経つた今も解決の手を差し伸べきれずにいる。

国連安保理事会は一九八九年に和平案を採択

し、国連憲章に則つた民族自決権行使を決議した。これにより西サハラ住民の意思を問う住民投票を組織するためにまず一九九二年に停戦を敷き、現地に国連派遣団MINURSOを駐屯させたが、モロッコが一度は受諾した住民投票をボイコットし続けているため、今日に至つても国連和平案は宙づりにされたままなのである。

モロッコでは一九六〇年代から八〇年代にかけて、前王ハサン二世の治世下二十年余を「鉛の時代」と呼ぶ。反体制派や国王にとつての邪魔者は暗殺、拷問死、投獄、行方不明などに処され、誰も彼もが恐怖心に口を閉ざし、国際人権団体も実態を掴みあぐねた時代だった。モロッコ国民がこれだけの人権侵害を受けていたのだから、西サハラの占領地でどれほどの内容と規模で人権問題が横行していたかは想像に難くない。西サハラ遊牧民の集団殺戮があつた事実が数年前に明るみに出たが、被害者たちは西サハラの人民、サハラウィーであるために殺されたのであり、これは民族浄化の犯罪である。

一九九九年に即位したモハメド六世は、王国の負のイメージ払しょくのため、「鉛の時代」の被害者手当を支給するなど様々な分野で画期的な政策を手がけ、モロッコに新時代の気運を与えた。しかし王政の三種の神器「国王、イスラム、サハラ」は現在もタブーとされ続け、国民は電気代を国王に払つていると言われるよう

に、このタブーを盾に国王は実業家として食指を動かす、即位十年で米国のフオーブス誌に番付されるまでになった。その背景には占領地西サハラにおける経済活動もあることは言うまでもない。モロッコが西サハラ占領を固執してきた経済的理由として水産資源とリン鉱石があったが、現国王はそれに加えて温室栽培に着手し、砂漠に広大なビニールハウスを設け、トマトを始め欧州向けの野菜果物を生産している。水源は太古の時代から蓄積されてきた化石水だ。こうして占領の四十年間で奪われ続けてきたものは住民の命や人権以外にも、本来彼らがその恩恵に与かるはずの水産、地下資源があり、その不当な資源略奪を黙認する輸入国がこれを支えるという仕組みがある。

占領下の西サハラではモロッコ人入植者が人口の過半数を占めるまでになり、二級市民として暮らすサハラウィーたちの抵抗運動の様相は「情報機器の普及と共に二〇〇五年以降国外へ向け発信されるようになった。」

そして二〇一〇年十月十日、ノーム・チヨムスキーが「アラブの春は西サハラで開始した」と後に評した。グデム・イジーク・テント村が生まれた。モロッコ占領下にある西サハラの首都エル・アイウンの住民たちが、抗議行動として全く自然発生的に郊外のグデム・イジークに数基のテントを張ったことが発端だ。その

テント群が瞬く間に約七千基に膨れ上がり、集まったサハラウィー二万人を数えるに至った。占領下の西サハラ住民人口は六万人と見積もられている。抗議村は当初は弾圧を回避するために労働条件などの社会的要求を掲げるに留まっていたが、日頃の占領支配から仮解放され、一つの村として機能し始めると自決権行使の要求、占領拒否の声が高まり、それが海外へ届いた。と同時にテント村はモロッコの軍隊、治安部隊に包囲され、死傷者が出るなどしたが、緊迫した困難な状況下でもおよそ一カ月の間維持された。外国人ジャーナリストが現地へ入ることも不可能で、サハラウィーの民族衣装で変装し潜入したジャーナリストたちが、抗議村を内側から取材することに成功しただけだ。

そして十一月八日早朝、占領軍は武力介入に乗り出し、テント村は解体された。これを逃れる市民は首都へ向かい、そこで市街戦が発生。三百名ほどの逮捕者を出し、最終的に二十五名の市民が二年以上裁判も受けずに拘束された末、二〇一三年二月、軍事裁判にかけられて禁固二十年から終身刑の宣告を受けている。

グデム・イジーク・テント村の運営の支柱となったのは『木の板で読み書きを教えてください先生』に登場するフリグを支えた伝統精神ではないか。ハサニーヤでツイイズと呼ばれる共同作業の精神だ。この出来事の後、アワフと

「友情の世代」はスペインで詩集『サハラウィーの春 (La Primavera sahariana)』を発表した。グデム・イジーク・テント村は詩の分野だけでなく、音楽でも、絵画でも西サハラのアーティストたちに影響を与えた。それら芸術活動の源には常に「解放」への希求がある。自分たちの国が地図上から消される瀬戸際に追い込まれた人々は、自らの存在を訴えることでこれに抵抗する。アーティスト一人一人に宿っている抵抗と使命の意志は、「アフリカ最後の植民地」と呼ばれる不当な境遇を生きる彼らにとつて現在のアイデンティティだろう。最後にアワフのスペイン語詩を一篇、紹介しよう。

ただ温和な、数十年  
自由への渇きはつるばかり  
君の潤う目が憩う  
端整な眼窩の間で  
ベドウインの君が待つのは  
予感の泉  
その君を、なんと切望してきたこの私

※「温和」は実現されない国連和平を指す。アラブ語で「目」の複数アイウンといい、首都名エル・アイウンはここから来ている。アイウンには、この三行先の「泉」の意味もある。「眼窩」には「台地」の意味があり首都の地形と掛詞になっている。